

中国思想は高校生にどのように教えられているのか

——平成28年度使用 高校「倫理」の教科書を分析して——

井ノ口 哲也

一 はじめに

筆者は、ここ数年、大学の学部の講義で、拙著『入門 中国思想史』（勁草書房、二〇一二年四月）を用いて、中国思想（史）を概説している。受講生は、概ね中国思想（史）の初学者であるが、中には、高校生の時に「倫理」という教科を受講して、一定程度の中国思想の知識を身につけている学生もいる。とはいえ、そもそも「倫理」の授業すら行なわれていない高校も少なくなく、また「倫理」が行なわれている高校でも、「倫理」を選択受講する生徒は多くはない。したがって、大学の学部の講義における受講生の圧倒的多数が、大学で初めて中国思想（史）を学ぶのである。筆者も、そうであった。

いったい、日本の高校の公民「倫理」の授業では、どの程度、中国思想が学習されることになっているのだろうか。この点は、筆者が大学で中国思想の講義を担当した時から知りたかったことであった。高校教員の教え方にも左右されるかもしれない。たとえば、大学で中国思想を専攻した者が高校の「倫理」担当教員になったばあい、その者自身が学んできた中国思想の知識を駆使して生徒の興味をひく話をし、一つの事 regarding 教科書の記述以上に詳しい説明

をすることも可能であろう。しかし、そうでないばあい、「倫理」の教科書に書かれてある中国思想の知識を（資料集等の補助教材を用いたりしながら）吸収するにとどまることが想像される。

本稿は、二〇一六（平成二八）年度現在、高校「倫理」の教科書として使用されている都合七種類の教科書①の内容を分析し、高校生が「倫理」の教科書を通じて、中国思想の知識をどの程度獲得することができるのかを明らかにし、その問題点について述べることを目的とするものである②。

二 『高等学校学習指導要領』における「倫理」の学習内容と中国思想

さて、「倫理」の教科書の内容を分析する前に、『高等学校学習指導要領』の「倫理」に中国思想がどのように取り扱われているのか、この点を確認しておこう。「倫理」の学習内容については、『高等学校学習指導要領』（東山書房、二〇〇九年九月）の、「第二章 各学科に共通する各教科」―「第三節 公民」―「第二款 各科目」―「第二 倫理」―「二 内容」に、以下のとおり、大きく三項目にわたって示されている。

- (1) 現代に生きる自己の課題
- (2) 人間としての在り方生き方
 - ア 人間としての自覚
 - イ 国際社会に生きる日本人としての自覚
- (3) 現代と倫理
 - ア 現代に生きる人間の倫理
 - イ 現代の諸課題と倫理

これらのうち、中国思想に深く関係しているのは、(2)のみである。(2) 全体の内容説明と、ア・イの各内容説明を以下に示すと、次のとおりである。

(2) 人間としての在り方生き方

自己の生きる課題とのかかわりにおいて、先哲の基本的な考え方を手掛かりとして、人間の存在や価値について思索を深めさせる。

ア 人間としての自覚

人生における哲学、宗教、芸術のもつ意義などについて理解させ、人間の存在や価値にかかわる基本的な課題について思索させることを通して、人間としての在り方生き方について考えを深めさせる。

イ 国際社会に生きる日本人としての自覚

日本人にみられる人間観、自然観、宗教観などの特質について、我が国の風土や伝統、外来思想の受容に触れながら、自己とのかかわりにおいて理解させ、国際社会に生きる主体性のある日本人としての在り方生き方について自覚を深めさせる。

以上の内容をどのように取り扱うかについては、『高等学校学習指導要領』では、「第二 倫理」―「三 内容の取扱い」の(2)のイで説明されている。上掲の(2)のア・イに関しては、次のように記されている。

イ 内容の(2)については、次の事項に留意すること。

(ア) アについては、ギリシアの思想、キリスト教、イスラム教、仏教、儒教などの基本的な考え方を代表する先哲の思想、芸術家とその作品を、倫理的な観点を明確にして取り上げるなど工夫すること。

(イ) イについては、古来の日本人の考え方や代表的な日本の先哲の思想を手掛かりにして、自己の課題とし

中国思想は高校生にどのように教えられているのか(井ノ口)

て学習させること。

イの(イ)は、日本思想に関することなので、本稿では、省略する⁽³⁾。中国思想に関して言えば、イの(ア)に、ようやく「儒教」という語が登場したが、しかし、これだけでは、いったい何をどれだけ勉強すべきなのか、という点に関する手掛かりが得られない。

そこで、参考までに、『高等学校学習指導要領解説 公民編』(教育出版、二〇一〇年六月初版)をみてみると、『高等学校学習指導要領』の上記の文章について、やや具体的に学習内容の指示がなされているのである。上掲の「内容の取り扱い」の(2)のイの(ア)について見てみよう。「儒教」については、次のように解説されている。

「儒教」では、孔子や孟子の言行を適宜取り上げ、儒教が人間をどのようにとらえているか、どう生きること求めているかについて、自己の課題と結び付けて考えさせる。例えば、仁や礼の言説を取り上げて、人間に就いての見方や、望ましい人間関係を築きながら社会生活をどのようにすべきかという課題を考えさせる。その際、性善説や性悪説などを取り上げることにより、今後の思索を深める視点とすることもできる。そして、人間に就いての深い洞察や共感的理解の重要性についても気付かせるようにする。これによって、ともすれば自己や身近な仲間うちのみ関心を向けがちな今日の生徒に、良識ある公民としていかに在るべきか、いかに生きるべきかについて思索を深めさせる。

「儒教」の学習内容として、具体的に、「孔子や孟子の言行」、「仁や礼の言説」、「性善説や性悪説」が挙げられている。言い換えれば、「儒教」を代表する具体的な先哲として、孔子・孟子・荀子が挙げられていることになる。

『高等学校学習指導要領解説 公民編』では、「儒教」の解説文の直後に、続けて、イの(ア)の文言について、次のように非常に細かい点にまで解説文が記されている。

なお、「内容の取扱い」では、「ギリシアの思想、キリスト教、イスラム教、仏教、儒教など」と「など」が付されており、これらの思想のほかに、指導の上で必要と考えられるものがあれば、老子・荘子の思想なども適宜取り上げられることもできる。その際、それらの基本的な考え方を取り上げるようにし、生徒の「人間としての自覚」を深めさせるという観点で取り扱うよう留意する必要がある。

高校の公民「倫理」という教科において、中国思想の内容として、「儒教」以外に「老子・荘子の思想」をとりあげてよいことの根拠は、「など」という文言にあるようである。そして、この文章においても、「老子・荘子の思想など」と「など」と記されているからには、この「など」も「老子・荘子の思想」以外の思想も適宜とりあげてよいことの根拠となるものであろうか。こんなふうと考えていくと、結局、「など」という文言が付いていることで、とりあげてよい思想は無限定となってしまう。すなわち、学習内容の選定は、高校の教壇に立つ「倫理」の担当教員に委ねられている、ということになるようである。

このように、『高等学校学習指導要領解説 公民編』では、中国思想の学習内容として、具体的に、儒教と老荘が挙げられている。そこで、以下、儒教と老荘に分けて、「倫理」の教科書の内容を紹介し私見を述べたいと思う。

三 儒 教

儒教については、各教科書の構成から、(Ⅰ) 孔子、(Ⅱ) 孟子、(Ⅲ) 荀子、(Ⅳ) 朱子・王陽明、(Ⅴ) その他、に分けて、それぞれの学習内容を確認し、検討を加えていくことにする。

(Ⅰ) 孔子(前五五二～前四七九)

孔子については、「仁」と「礼」をキーワードとしてその思想が説明されている。「仁」を表す四字熟語として「克

中国思想は高校生にどのように教えられているのか(井ノ口)

「己復礼」が示され、「仁」の内容として、様々な立場にある他者との間の秩序を示す「孝」「悌」「忠」「恕」「信」に言及がなされている。また、「仁」と「礼」を身につけた有徳の理想的人間を指す「君子」やその対義語である「小人」も登場する。さらに、孔子が理想としたとされる政治の方針「徳治主義」は、「修己治人」を理想とすることが紹介されている（「徳治主義」という語は孟子の所で登場する教科書もある）。

『論語』の中の孔子の言葉も、教科書中のコラム欄や文中に引用されている。実は、中国古典の中で、『論語』ほど、「倫理」の教科書に引かれているものは、ほかにないのである。そこで、七種の教科書に引用されている『論語』の文章を列挙すると、以下のとおりである。

「学びて時に之を習う、亦説ばしからずや。朋、遠方より来たるあり、亦樂しからずや。人知らずして慍らず、亦君子ならずや。」（学而篇）

「巧言令色、鮮ないかな仁。」（学而篇）

「人の己を知らざるを患えず、人を知らざるを患えよ。」（学而篇）

「政を為すに徳を以てすれば、譬えば北辰の其の所に居て、衆星の之を共るが如し。」（為政篇）

「子曰わく、吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず。」（為政篇）

「故きを温めて新しきを知る、以て師と為すべし。」（為政篇）

「君子は器ならず。」（為政篇）

「子曰わく、学びて思わざれば則ち罔し。思うて学ばざれば則ち殆し。」（為政篇）

「由よ、汝に知ることを誨えんか、これを知るはこれを知るとなし、知らざるを知らずとなす、これ知るなり。」（為政篇）

「義を見て為ざるは勇なきなり。」（為政篇）

「人にして仁ならずんば、礼を如何せん。人にして仁ならずんば、楽を如何せん。」(八佾篇)

「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。」(里仁篇)

「利に放りて行なえば、怨み多し。」(里仁篇)

「子曰わく、君子は義に喩り、小人は利に喩る。」(里仁篇)

「君子は言に訥にして、行に敏ならんと欲す。」(里仁篇)

「徳孤ならず、必ず隣あり。」(里仁篇)

「季路、鬼神に事えんことを問う。子曰わく、未だ人に事うること能わず、焉んぞ能く鬼に事えん。曰わく、敢えて死を問う。曰わく、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。」(先進篇)

「己に克ちて礼に復るを仁と為す。一日己に克ちて礼に復れば天下仁に帰す。仁を為すは己に由る。而して人に由らんや。」(顔淵篇)

「樊遲、仁を問う。子曰わく、人を愛す。」(顔淵篇)

「其の身正しければ、令せずして行なわれ、其の身正しからざれば、令すと雖も従わず。」(子路篇)

「君子は和して同せず、小人は同じて和せず。」(子路篇)

「剛毅木訥は仁に近し。」(子路篇)

「子貢問いて曰わく、一言にして以て終身これを行なうべき者あるか。子曰わく、それ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ。」(衛靈公篇)

「過ちて改めざる、是れを過ちと謂う。」(衛靈公篇)

これらの『論語』の文章は、いわば格言として人口に膾炙した例や、教科書の文中に言及される君子(または小人)や仁についての理解を助けるものであるほか、文章を読むことで道徳・倫理を学ぶ効果もあると言える⁴⁾。

以上の各教科書に見える孔子に関する記述は、『高等学校学習指導要領解説 公民編』の「……、孔子や孟子の言

行を適宜取り上げ、……、例えば仁や礼の言説を取り上げて、……。」におおむねしたがったものとなっている。

しかし、上述したものの中に、孔子の思想の説明に用いる語としてふさわしくないとと思われるものがある。それは、「修己治人」である。「克己復礼」は、教科書にも引用されるように、『論語』顔淵篇に見える語であるが、「修己治人」はそうではない。儒家思想のテキストでは、「修己」は、『論語』憲問篇に孔子の語ったことばとして見え、『荀子』君道篇にも見えるのが早い例である。「治人」は、『礼記』中庸篇（のちの『中庸』）にも見えるが、『孟子』に三例（滕文公篇上に二例、離婁篇上に一例）見えるのが早い例である。では、「修己治人」という四字熟語は、どうして孔子の思想の説明に用いられているのか。実は、この「修己治人」は、『大学章句』序や『晦庵先生朱文公文集』巻第四十「答何叔京」に朱熹が用いた語として見えるほか、『宋史』朱熹列伝にも朱熹が泉州で優秀な「弟子員」をあつめ、「日び与に聖賢の修己治人の道を講説」した旨が記されている。「修己治人」は、朱子学に由来する語と見てよいであろう。すなわち、「修己治人」の語を用いた孔子の思想の説明は、朱子学というフィルターを経由したものにほかならず、孔子の思想を孔子が生きた当時の文脈で捉えたものではない、ということになる。

(II) 孟子（前三七二～前二八九）

孟子については、性善説、「四徳」（仁・義・礼・智）とその端緒である「四端」（惻隱の心・羞惡の心・辭讓の心・是非の心）、「仁義」に基づく「王道（政治）」とそれに対する「霸道」、「易姓革命」がとりあげられている。「四徳」が体に満ち充実している状態を「浩然の氣」と呼び、それを身につけた人を「大丈夫」ということも説明されている。また、のちの陽明学を意識してか『孟子』中の「良知」「良能」の両語に言及があり、君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の五つの人間関係を表す「五倫」も説明される（「オ」は五倫のうちの三綱にも言及する）。

(III) 荀子（前三二三～前二三八）

荀子の思想の説明は、性悪説と礼に尽きている。

性悪説は孟子の性善説批判である。礼は、平等主義が当たり前の今日の日本で、どこまで正確に理解されるのであろうか。荀子は、

礼者、貴賤有等、長幼有差、貧富輕重皆有称也。

(『荀子』富国篇)

〔礼〕とは、身分の貴賤に等級があり、年齢の長幼に差別があり、経済的な貧富や社会的立場の輕重にバランスがある、ということである。)

と述べている。すなわち、荀子の説く「礼」とは、等級・差別・順序を設けることで人間関係を秩序づける社会規範を意味する。見方をかえて言えば、平等主義のもとには「礼」は成立しないのである。では、荀子は、他人との間に等差をつけてまで、何のために「礼」を設けたのであろうか。それは、人間の「欲」の調整のためであった。

荀子に附属して説明されているのが、彼の弟子の韓非(？)前二三三)であり、荀子の礼治主義から法治主義へと展開した、と位置づけられている。

(IV) 朱子(一一三〇)～一二〇〇)・王陽明(一四七二)～一五二九)

朱子と王陽明は、両者の思想を示すキーワードによって説明されている。

朱子のばあい、この世界の構成を「理」と「氣」で説く「理氣三元論」、「居敬(持敬)窮理」(もしくは「居敬」(「持敬」と「窮理」)、「性即理」、「格物致知」、「修身・齐家・治国・平天下」などがとりあげられている。

そして、王陽明のばあい、「知行合一」、「心即理」、「致」良知、「事上磨鍊」が説明されている。

朱子と王陽明は、『高等学校学習指導要領解説 公民編』の「儒教」の説明文の中でとりあげるべき思想家とされているにもかかわらず、高等学校「倫理」の全ての教科書にとりあげられている。それは、孔子・孟子・荀子のあとに展開した新しい「儒教」としての意味、朱子・王陽明の思想内容それ自体の意義、江戸時代の儒学に大きな影響を及ぼし

中国思想は高校生にどのように教えられているのか(井ノ口)

たということ、これらが大きく関係していよう。

朱子学と陽明学は別々の学問体系として記されているが、王陽明が朱子学の学習者であったことにふれる教科書は無い。陽明学は、王陽明が「理」を窮めようとして窮められず、朱子学に行き詰った先に生み出された学問体系である。言わば、陽明学は、朱子学から枝分かれした学問体系と言える面をも有しているのである。

(V) その他

全ての教科書を通覧すると、「儒教」と「儒学」の定義や使い分けが適切かどうか、という問題があることに気付く。これは、難しい問題であり、教科書の執筆者の責任でもなく、「儒教」と「儒学」に明確な定義をくだせないでいる現在の学界の状況を反映している現象として現われている。「儒教」は「儒学」と同じ意味でよいのか、意味が異なるとしたらどの次元でどのように異なってくるのか、たとえば、少し話の範囲を上げると、道教・中国仏教に照らしたばあいの「儒教」とは何なのか、「儒教」は宗教的な要素を考慮に入れなくてよいのか、といったことを考えると、「儒教」に十全かつ明確な定義をくだせるものであろうか。

ここで、「儒教」を考える手がかりとして、「儒教」の説明をしている教科書の文章を検討したい。いま、紙幅の関係で、教科書〔イ〕のみの文章を引用するにとどめる⁵⁾。

仁の思想 中国古来の血縁的秩序のなかに、他者への愛につらぬかれた円滑な共同社会を見いだし、それを普遍的な人間関係の理法へと高めたのが、孔子の教え、すなわち儒教である。

孔子は、春秋時代の末期に魯の国に生まれた。孔子の母は、葬礼や招魂儀礼にたずさわった、「儒」とよばれる宗教者階層の一員だったともいわれる。彼は、礼にもとづく統治を完成させたといわれる聖人周公旦にあって学問にはげみ、周の衰退とともに失われた礼の復興につとめた。

孔子の教えは、彼と門人たちの言行を集録した『論語』に伝えられている。孔子は、祭祀儀礼に深く通じてい

たと伝えられるが、しかし、彼の関心は自然の神秘を探究することにはなかつた（怪力乱神を語らず）。また、死後の安心を直接に問うこともなかつた（未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん）。彼の探究はもっぱら、現実社会のなかにおける礼の意義と、礼にもとづいて実現すべき人間の正しいあり方に向けられていた。この人間としてもつとも望ましいあり方を、孔子は、「仁」ということばであらわした。

これによると、「孔子の教え」が「儒教」である、という。そして、ここに出てくる「儒」の見方は、実は、白川静氏（一九一〇～二〇〇六）や加地伸行氏（一九三六～）らによる見解が教科書に反映されたものである^⑥。孔子も「儒」の一員であつた、と考えられている。その孔子は、教科書によると、自然の神秘の探究に関心がなく、死後のことも問わず、彼の関心は、もっぱら、現実社会における礼を通じて人間のあり方を探究することにあつた。しかし、特に「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん」については、先に引用した「季路、鬼神に事えんことを問う。子曰わく、未だ人に事うること能わず、焉んぞ能く鬼に事えん。曰わく、敢えて死を問う。曰わく、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。」（先進篇）全体を視野に入れた加地伸行氏による、以下のような反論がある^⑦。

この章の場合、後半の句「未知生、焉知死」だけを取り出し、（生のことが分からないのに、死のことが分かるはずがない）と解し、（死については考えない）、さらに（死について考えるのは無意味）とし、孔子は死について語らず無関心であつたという解釈が、古来、一般的であつた。それは誤解である。この章の前半が示すように、鬼神とりわけ鬼という靈魂問題を取りあげているように、後半も具体的な死の問題についての議論と解する。（もし）あるいは（まだ）、在世の親に対して十分に事えることができなかつたり、親の意味が分からないのであるならば、親の靈魂や死の問題についてとても事えたり理解したりすることはできないと孔子は言っているだけである。『論語』全編を読めば分かるように、孔子は靈魂や死について強烈な関心を有している。従来（孔子は死について無関心）という観点では、『論語』のみならず、儒教について理解することはできない。

中国思想は高校生にどのように教えられているのか（井ノ口）

筆者は、加地氏の意見に賛成である。「儒」の環境で育った孔子が、靈魂や死に無関心でいられるはずがないからである。特に「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん」については、他の教科書も軒並み同じ論調で記されているのであるが、「倫理」の教科書における「儒教」理解は間違っている、と言わざるを得ないのである。⁸⁾

四 老 莊

老莊については、(Ⅰ)老子、(Ⅱ)莊子、(Ⅲ)道教に分けて、それぞれの学習内容を確認し、検討を加えていくことにする。

(Ⅰ) 老子 (生没年未詳)

各教科書における老子の思想を説明するキーワードを挙げると、「道」、「無為自然」、「小国寡民」、「柔弱謙下」、「無」、「上善は水のごとし」、「知足」、「玄德」などである。

ここで注意しなければならないのは、キーワードの中に見える三つの四字熟語のうち、『老子』のことばは「小国寡民(第八十章の語)のみであり、「無為自然」「柔弱謙下」の両語は『老子』のことばではない、ということである。

「無為自然」については、「無為」と「自然」に分けて考えねばならない。なぜなら、「無為」と「自然」は、『老子』のことばだからである。「無為」とは、他者に対して必要以上の余計な働きかけをしない(逆に言えば、必要最低限のことはする)という意味である。「自然」は、「みずからしかり」と「おのずからしかり」の二通りに訓めるが、『老子』のばあい、前者が正しいであろう⁹⁾。「無為」と「自然」の両語がくっついて「無為自然」という四字熟語が成立するのは漢代になってからのことである¹⁰⁾。すなわち、「無為自然」という漢代に成立したことばによる老子の思想の説明では、その思想が展開された当時の文脈に即した説明ではあり得ず、ふさわしくないのである。

「柔弱謙下」については、「柔弱」は『老子』のことばであるものの、「謙下」は『老子』のことばではない。「柔弱

謙下」は、『莊子』天下篇に見える「濡弱謙下」という語を改変した表現のようであり、現在それが老子の思想の説明に誤って用いられているのである。

実は、『老子』については、本稿を執筆している二〇一六年九月の時点で、依拠すべきテキストが、以下の①②③④のとおり、少なくとも四種類確認されており、思想内容の検討には慎重を期する必要があるが生じている。長い間、『老子』のテキストのスタンダードとされてきたのは、①魏の王弼（二二六～二四九）が注した『老子』であった。魏の王弼が『老子』に注し、それがテキストとされたことの意味は、魏代の時点での『老子』の文言を今日に伝えていることにある。しかし、魏代以前の『老子』の文言が確認できるようになって、情況は一変した。二十世紀後半、前漢時代の『老子』と戦国時代の『老子』が出土資料として出現したのである。一九七三年、湖南省長沙市の前漢時代の墓から帛（絹のこと）に記された二種類の『老子』が出土した。これを②馬王堆漢墓帛書『老子』という。一九九三年、湖北省荆門市郭店村の戦国時代の楚の墓から竹簡に記された三種類の『老子』が出土した。これを③郭店楚墓竹簡『老子』という。最も古い『老子』である郭店楚墓竹簡『老子』は、章の配列もとのついでなかつたようで、第六十七章～第八十一章に該当する部分が無いのである。そうすると、教科書で示されている第八十章の「小国寡民」という考え方は、戦国時代の『老子』には無かつた可能性もある。そして、二〇一二年末になって、④北京大学所蔵の前漢時代の竹簡『老子』が公開され、現在研究が進められている最中である。以上からは、『老子』のオリジナルの姿や現在知られる『老子』に至るまでの形成過程が注目されている、と指摘することができる。

ところで、『老子』の文章も、『論語』ほど多くはないが、教科書に引用されている。それらを列挙すると、以下のとおりである。

「道の道とすべきは、常の道にあらず。名の名とすべきは、常の道にあらず。無は天地の始に名づけ、有は万物の母に名づく。」（第一章）

「上善は水の若し。水は善く万物を利して而も争わず。衆人の悪む所に拠る。故に道に幾し。……。」（第八章）

中国思想は高校生にどのように教えられているのか（井ノ口）

「大道廢れて仁義あり。知恵出でて、大偽有り。六親和せずして孝慈有り。国家昏乱して忠臣有り。」(第十八章)
 「学を絶たば憂い無からん。」(第二十章)

「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る。」(第二十五章)

「道は常に為す無くして、而も為さざるは無し。侯王もし能く之を守らば、万物將に自ら化せんとす。」(第三十七章)

「天下に水より柔弱なるは莫し。而も堅強なる者を攻むるに、之に能く勝つこと莫し。其の以て之に易うる無きを以てなり。弱の強に勝ち、柔の剛に勝つこと、天下知らざるは莫くして、能く行うこと莫し。」(第七十八章)

これらは、「道」への理解を助ける引用であつたり、知・学の否定や水の柔弱性など『老子』の思想の特徴を代表しているものが引用された、と理解できる。

(II) 莊子(前三六九〜前二八六)

莊子については、「万物斉同」の思想と「真人」が説明されている。「逍遙遊」や「心齋坐忘」もしくは「心齋」「坐忘」の語も見える。『莊子』の寓話は「胡蝶の夢」が最も多い。

ここに挙がった二つの四字熟語すなわち「万物斉同」「心齋坐忘」は、いずれも『莊子』中のことばではない。それぞれについて、少し述べておきたい。

まず、「万物斉同」については、「斉同」も『莊子』のことばでない。『莊子』には、徳充符篇に「自其同者視之、万物一也。」とあり、天地篇に「万物一府、死生同状。」とあり、秋水篇に「万物一斉、孰短孰長。」とあり、天下篇に「斉万物以為首。」とある。これらの表現から「万物斉同」ということばが生み出されたのであろう。

次に、「心齋坐忘」については、「心齋」と「坐忘」はいずれも『莊子』のことばである。「心齋」は『莊子』人間世篇における孔子と顔回のやりとりに見え、「坐忘」は『莊子』大宗師篇における孔子と顔回のやりとりに見えるの

みである。「心齋」と「坐忘」は、『莊子』においては異なる篇において登場しており、本来無関係のはずである。なぜ、これらが合わさって四字熟語になるのか、その理由はよく分からない。

ちなみに、老子の思想と莊子の思想は「老莊思想」と一括りにして言われるが、「老莊」は漢代の『淮南子』要略篇に初見の語である⁽¹⁾。

(Ⅲ) 道教

道教は、老子・莊子(道家)に附属し、道家の思想と民間信仰が結びついてできた宗教と説明されている。

五 その他

ここでは、儒教と老莊という二つの枠組では拾いきれなかった、教科書中に見られる中国思想のトピックを四つ、紹介したい。

(Ⅰ) 墨子

墨子またはその後学を含めた墨家については、墨子や墨家が一目目としてとりあげられて説明されている教科書は少なく、多くはコラム欄や注に簡単な説明がある程度である。

その思想は「兼愛」と「非攻」に代表されるが、「兼愛」に附随して「交利」や、また「節用」「節喪」など儉約を説く思想もとりあげられている。墨家の思想は儒家に対するものと位置づけられ、「兼愛」に対する「別愛」、「交利」に対する「自利」の語も見られる。

(II) 諸子百家全般

多くの教科書には、諸子百家の一覧表が載っている。おおむね九学派（儒家・道家・法家・墨家・名家・縦横家・兵家・農家・陰陽家）が挙げられる。これらは春秋・戦国時代の当事者意識による分け方ではなく、漢代以降の分類に基づいている。

(III) 天人相関説

天人相関説については、次の記述を見たい。

中国には、人間を自然界（天）の一部としてとらえ、全体性のなかでのあるべき生き方を探究する思索がみられる。自然界と人間界に密接なつながりがあるとするとする思索を、天人相関説という。この思想は、古くは荀子によって迷信だと批判され、近代になると科学に反するとしてしりぞけられてきた。

（「オ」七二頁）

このあと、教科書「オ」では、現代の地球温暖化や人間の活動の自然界への影響について述べられる。天人相関説は、漢代の董仲舒（前一七六頃～前一〇四頃）のそれがよく知られているが、戦国時代の思想を伝える『荀子』天論篇や一九九三年に出土した郭店楚墓竹簡の「窮達以時」と呼ばれる竹簡に、天と人とは関係しない思想が見える¹²⁾。このことは、逆に、中国では古い時代から延々とこの天人相関説が支持されてきたことを示している。

天人相関説は、人の倫理的行動と自然界との関わりを考えるうえで有効な考え方であり、高校「倫理」の教科書にもっと採用されてよいのではなからうか。

(IV) 中国の近代思想

近代中国について言えば、「倫理」の教科書には、革命家・思想家としての孫文（一八六六～一九二五）と毛沢東

(一八九三)一八九七六)、文学者の魯迅(一八八一)一九三六)がとりあげられている。このうち、毛沢東は、孫文の三民主義に続けて言及されたり、マルクス(一八一八)一八八三)やレーニン(一八七〇)一九二四)に続く人物として登場する。

六 おわりに

以上、紙幅の関係でふれ得なかつた点多々あるが、本稿では、『高等学校学習指導要領』と『高等学校学習指導要領解説 公民編』の方針を確認したうえで、高校「倫理」の教科書に見える中国思想の記述について考察し、私見を述べてきた。

どの高等学校がどの検定済み教科書を採用しようとも、学び手である高校生が教科書を通じて学習することのできる内容に大きなバラツキがあつてはならない。これが理想である。しかし、教科書ごとに執筆者が異なれば、できあがる教科書の内容も自然と異なってくる。すなわち、採用する教科書によって学習することのできる内容に少なからぬバラツキが生じてしまう。これが現実である。この理想と現実の間に生じる差異は、どのようにすれば、解消されるのであろうか。それは、何よりも教壇に立つ高校教員の手腕にかかっている。『倫理』担当教員は、勤務先が採用した教科書の内容を教えるだけでは不十分であることに細心の注意を払い、その不足を補うべき不断の努力がもたらめられている、と言える。「検定済」というお上のお墨付きをもらった教科書といえども、所詮、人の作ったものである。その証拠として、ある思想を説明する用語としてふさわしくないものがいくつも見られたように、(執筆者サイドにそのつもりはなくても)誤った記述も教科書には存在するのである。

教科書中の誤りを指摘した本稿が、もし高校「倫理」の教科書の今後の改善のために貢献できるのであれば、これにまさる欲びは無い¹³⁾。日本の教育課程で初めて詳しく中国思想を学習する機会を得られる高校生に、中国思想の知識を正しく修得してほしい、と心から願うばかりである。そうあってこそ、近年振るわない中国学の裾野を拡げる

ことにもつながっていくのではないだろうか。

注

(1) 二〇一六年(平成二八年)度、日本全国の高等学校で使用されている「倫理」の教科書は、以下の「ア」～「キ」のとおり七種類である(この情報は文部科学省のホームページにおける「教科書目録」の「平成二十七年四月目録(平成二十八年年度使用教科書)」にアップされているPDFファイル「高等学校用教科書目録(平成二十八年年度使用)」の公民・倫理十三頁に基づくが、以下に列挙している教科書の順番はこれに拠っていない)。

〔ア〕「高校倫理」(執筆・矢内光一ほか、平成二四年検定済、実教出版)。

〔イ〕「高等学校 新倫理 最新版」(執筆・菅野覚明ほか、平成二四年検定済、清水書院)。

〔ウ〕「現代の倫理」(執筆・濱井修ほか、平成二四年検定済、山川出版社)。

〔エ〕「倫理」(執筆・片山洋之介ほか、平成二四年検定済、数研出版)。

〔オ〕「高等学校 倫理」(執筆・越智貢ほか、平成二四年検定済、第一学習社)。

〔カ〕「倫理」(執筆・竹内整一ほか、平成二五年検定済、東京書籍)。

〔キ〕「高等学校 現代倫理 最新版」(執筆・村上隆夫ほか、平成二五年検定済、清水書院)。

(2) 筆者は、かつて二〇〇六年度使用の「倫理」の教科書計十種の内容を分析して、拙稿「高校「倫理」と中国思想」(東京学芸大学平成十八年度重点研究費報告書「現代日本の高校教科書における中国認識形成に関する研究」、東京学芸大学、二〇〇七年三月、以下、「前稿」と呼ぶ)という形で報告したことがある。本稿の基本的な骨格は、この拙稿によって組み立てられているものである。

しかし、前稿から約十年が経過し、教科書の数が減り、内容にも少なからぬ変化が見られたことから、平成二八年度使用の教科書に依って、あらためて稿を起すことにした。加えて、前稿は、本務校の重点研究費による報告書であり、国立国会図書館に納本したほかは、いくつかの中国学に近い大学・研究機関の図書館や学内外の関係者に送付するにとどまり、結果的に、多くの人々が容易に参照できる媒体とはなっていないかった。このたび、前稿を全面的に見直し最新情報に更新した本稿を本紀要に掲載することの意義は、まさにこの点にある。

なお、本稿の内容は、筆者が毎年度担当する機会を得ている、本務校における免許状更新講習の選択科目「道徳」教育・「倫

理「教育と中国思想」においても、部分的にとりあげてきたものである。

- (3) もちろん、中国思想の影響をダイレクトに受けた日本の思想、たとえば、中国大陸・朝鮮半島から伝えられた仏教や江戸儒学については、中国思想の影響が濃厚であり、とりあげる意味もあるであろう。実際、注(2)で言及した報告書や免許状更新講習の場では、「倫理」の教科書が言及する範囲のトピックとして、前者については大乘仏教・聖徳太子・鑑真・最澄・空海・栄西・道元を、後者については朱子学派・陽明学派・古学派をとりあげた。しかし、今回は、紙幅の関係もあり、主に中国大陸の儒教と老荘を対象を絞って考察することにした。

- (4) 高校の「倫理」は、小・中学校の「道徳」の延長線上に位置している。このことは、「中学校学習指導要領解説 道徳編」(日本文教出版、二〇〇八年九月)に、高等学校における道徳教育および「倫理」に関して、「第一章 総説」―「第一節 道徳教育改訂の要点」―「二 道徳教育改訂の趣旨」―「(3) 改善の具体的事項」の(エ)において、次のように述べられている。

高等学校においては、高等学校のすべての教育活動を通じて道徳教育が効果的に実践されるようにするため、学校としての指導の重点や方針を明確にし、道徳教育の全体計画の作成を必須化するとともに、各教科や特別活動、総合的な学習の時間がそれぞれの特質を踏まえて担うものについて明確にする。

また、社会の一員としての自己の生き方を探求するなど、生徒が人間としての在り方生き方にかかわる問題について議論し考えたりしてその自覚を一層深めるようにする観点から、中核的な指導場面となる「倫理」や「現代社会」(公民科)、「ホームルーム活動」(特別活動)などについて内容の改善を図る。

- (5) 注(1)所掲「イ」の六〇頁から。

- (6) 白川静『孔子伝』(中央公論社、一九九二年二月/もと一九七二年十一月)、加地伸行『孔子』(KADOKAWA、二〇一六年四月/もと『孔子』時を越えて新しく)、集英社、一九八四年七月。

- (7) 加地伸行『孔子』(前掲)二五〇頁の注(3)から。

- (8) 同様の趣旨のことは、拙稿「巫祝の子 孔子」(『宗教史学論叢』21巻)、リトン、二〇一七年三月刊行予定)で述べている。

- (9) 池田知久「中国思想史における「自然」の誕生」(『中国』社会と文化)、中国社会文化学会、一九九三年六月)、井ノ口哲也「王充の「自然」観」(『東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学』第五十六集、東京学芸大学、二〇〇五年二月)を参照。私見によれば、少なくとも後漢初期にもなお「自然」に「みずからしかり」の意味が保存されていた。

- (10) 「無為自然」あるいは「自然無為」の語が後漢時代にできたであろうことについては、田中麻紗巳「淮南子」の「自然」に

中国思想は高校生にどのように教えられているのか(井ノ口)

ついで―前漢道家思想の一面―(『集刊東洋学』第三十六号、一九七六年一月)に指摘がある。

(11) 金谷治氏(一九二〇―二〇〇六)は、『老荘』について、以下のように述べている。

『老子』と『荘子』とを並べあげて重視し、『老荘』ということばを使うのは、『淮南子』から初まることで、それ以前の文献として確実なものには両者を近親なものとして説いた例がなく、……。『老子』と『荘子』とは本来無関係にできあがり、それを信奉する人々も別派をなしていたらしいのを、恐らく初めて、その類似性に注目してそれを問題としてとりあげたのが、淮南の道家学者たちではなかったか。(金谷治『老荘の世界―淮南子の思想―』平楽寺書店、一九五九年／『淮南子の思想―老荘の世界―』講談社、一九九二年、一四一頁―一四三頁)

(12) 「天人の分」とは、天が人(＝地上の統治者)とは独立した別個の存在で人と関係することがないという考え方である。この登場前は、天は意志をもつ存在で人に働きかけ、人からも天に働きかけられると考えられてきた。「天人の分」については、長い間、『荀子』天論篇の、

天行有常、不為堯存、不為桀亡。……故明於天人之分、則可謂至人矣。(天の運行には一定不変性があり、堯のために存在するのではなく、桀のために亡失するのでない。……従って天と人の区別に明らかかな人は、最高の人物と言える。)

という記述により、『荀子』天論篇特有の思想と考えられてきた。しかし、

有天人、天人有分。(天があり人があり、天と人には区別がある。)(『窮達以時』)

という戦国時代の郭店楚墓竹簡が一九九三年に出土したことで、「天人の分」が『荀子』天論篇のオリジナルの思想であるか疑わしい、という意見が提出されている。

(13) そういう意味では、高校「倫理」の教科書における宗教に関する記述について疑念を抱いた藤原聖子『教科書の中の宗教―その奇妙な実態』(岩波書店、二〇一一年六月)と、問題意識は同じ方向を向いているのであろう。

なお、高校生に手にとってもらいたい高校「倫理」のための書籍として、直江清隆・越智貞編『高校倫理からの哲学』全五冊(「1 生きるとは」「2 知るとは」「3 正義とは」「4 自由とは」「別巻 災害に向きあう」、岩波書店、二〇一二年)を挙げておく。ちなみに、中国思想の執筆者は、串田久治氏である。